
オーク出産祭


出産経験数
１人
ウソ！
こんな大勢の前で
するの！？
これまで
色々あったけど
一番恥ずかしい
ガヤ
ガヤ
出産経験数
１人
アタイ聞いてない
帰っていいかな…
出産経験数
３人
諦めた方がいいわ
言って聞くような奴ら
じゃないから
うえぇ…
オマエラ
出産祭が
ハジマるゾ！
バカ
そんなすぐ
出てくるわけ
…


ドクン
破水力？
ウソ！ホントに産まれる!?
…アタイ
みんなの前でこの子のママになるの？
怖がらず早く出ておいで
お母さんが守ってあげるから
ビシャアアア♡
ゴポッ♡
ビチャビチャ♡


ブシャァァァッ♥
オッ！ナンダ？
潮を吹いたナ
雌になってモ我らの子供を出産するの二人間は耐えられヌ
出産時はこうやッテ雌の印が快楽も与えてるのダ
もっとモ死ぬ程辛い事ハ変わらんがナ
ソロソロ出てくるゾ
頭！
メリメリ
イキ過ぎて母乳出てるゾ
顔出てきたナ
ガンバガンバ
あと少シ
オ！
産まれる！
うう！お股が……！
死んじゃう！
…けど！
だめっ幸せ過ぎて！
誰にも！見せられない顔してる！




オメデトウ！
メデタイ
我々の繁栄を祝オウ！
パチ
パチ
パチ


オーク様♡
これからもボク達を
いっぱい孕ませてね♡
我らオーク族の
繁栄を祝おうぞ！
めでたい！
今夜は飲み明かそう！
パチパチ
パチパチ
パチパチ
オーク出産祭2 終わり


オーク出産祭２


オーク出産祭２


オークの祭りが始まる。
その名は「出産祭」
雌たちがオークの前で出産する祭り。
選ばれた雌たちは祭りの準備をしていた…

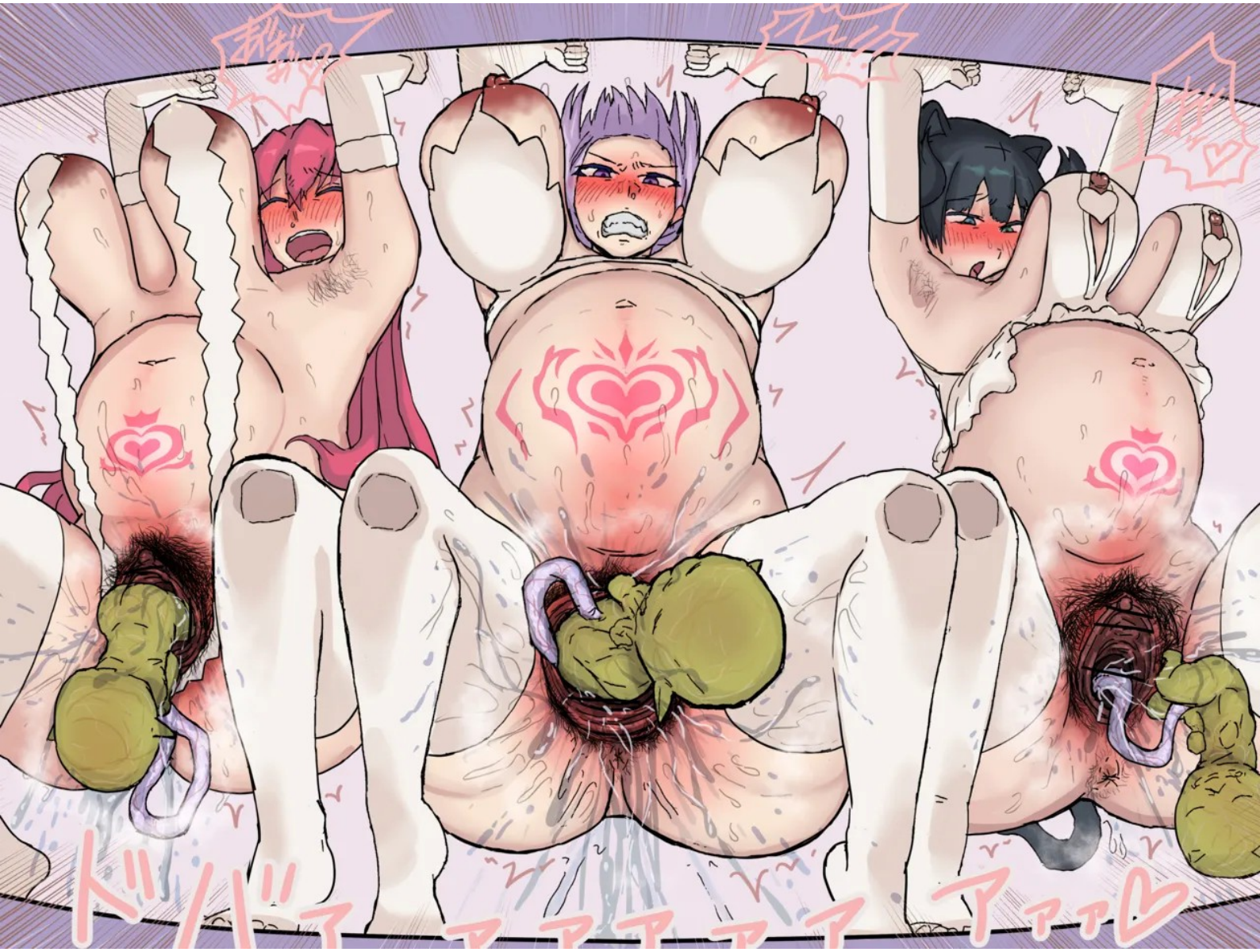

うう…恥ずかしい
いつも通りやれば大丈夫だから
あいつどこにいるかな？
うわぁ、凄い数…不安だわ
ドキ
ドキ
ドキ
ガヤ
ガヤ
ガヤ
ガヤ
宴が始まるぞ!!


ずるっ……♡
みんなの前へお尻を向けて…
…アソコを見せつける
うう…こんなに大人数に見られるなんて
エロい雌の臭いだ
穴の奥まで良く見えるぞ
良く実った尻だ孕ませてえ
モワ…♡


うお！
何だ!?
あ♡
あ♡
あ♡
破水が始まったな
ブシャァァ♡


お腹で暴れてる！
赤ちゃんが出ようとしてる!?
母乳が！なんで!?


頭が出て来たぞ
グジュ
グジュ
もう少しだ
グポ♡
3人とも生まれるぞ
メリメリ
死んじゃう！
頑張って！ボク！
脱が裂けちゃいそう！


ドバァ

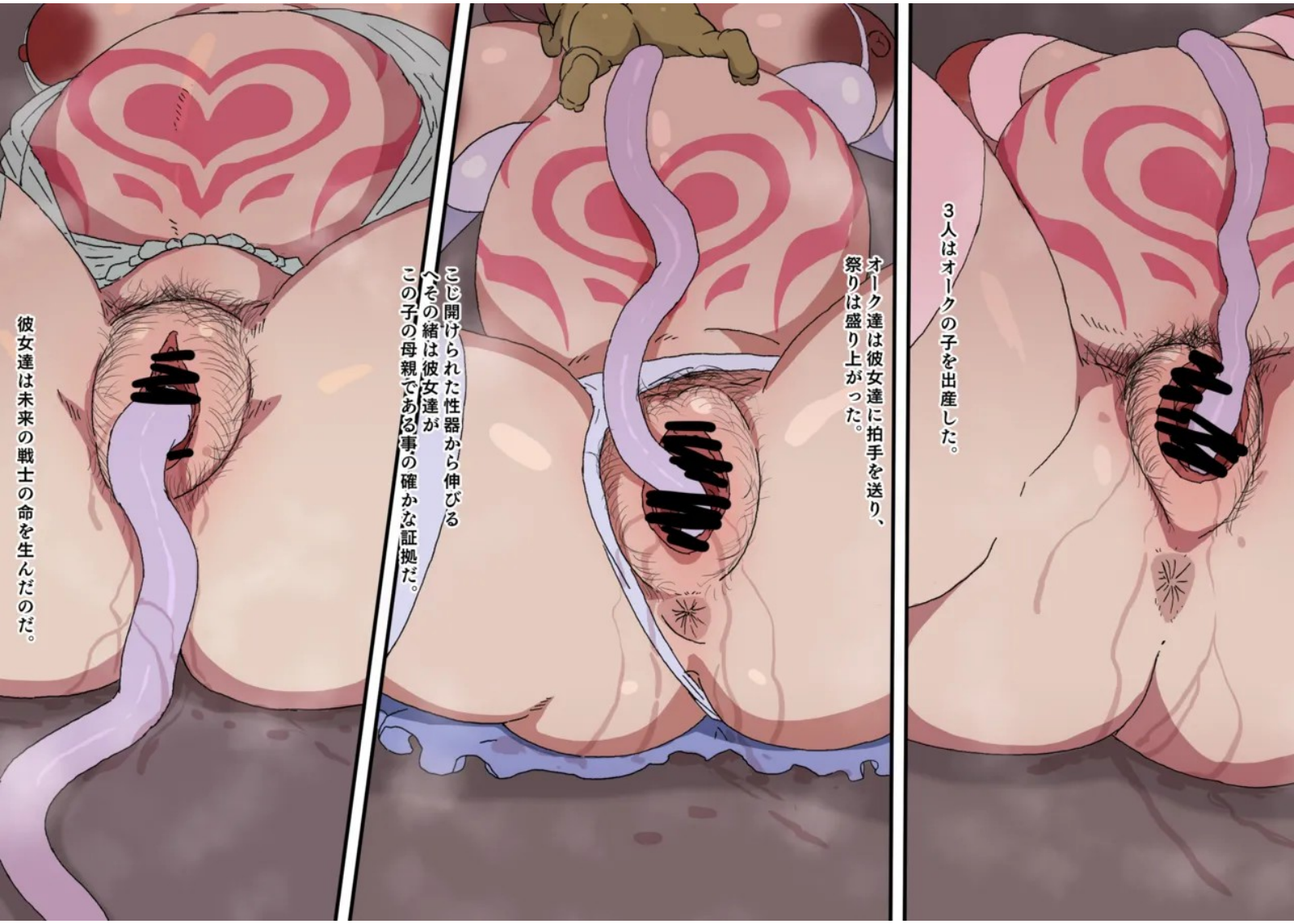

オーク出産祭３


3人の雌がステージの上に立つ。
その周りをオーク達が囲っていた。
アロマ
「まさか、お二人と
一緒にいれるなんて
幸せです。」
カンナ
「そんな事言うなよ、
雌はみんな平等だろ？」
マハリタ
「そうよ、だから敬語はなしよ。」
騎士団の副隊長と
有名な踊り子だった
二人がそう言った。
「そ、そうね。
ならはじめるよ、
オーク様。
私たちが未来の戦士達を
産む姿を見てください。」
こうして祭りが始まった。


（あの人も見てるから、
私頑張ってオーク様たちに貢献しないと！）
「んいいいいい！！」
彼女は出産の痛みに耐えていた。
大人しそうな顔から
想像できない程、
苦悶の表情をした。
ぶじゅっ
ぶじゅっ
ぶじゅっ
ぐぼぼ
はぁ
うっ！
はぁ


「ご覧ください、オーク様！」
はぁ…♡
はぁ♡
はぁ♡
苦しみと快楽の
混じった声でそう言った。
股を開き踊る彼女の股間に
緑の頭が覗かせていた。
ぶるん
ぶるん
「はあ、はあ、産まれちゃう！？
みんなに見られながら赤ちゃん産んじゃう！」
じゅぶ
じゅぶじゅぶ


「産まれる！」
じゅぶじゅぶと卑猥な音を立てた。
オークの赤ちゃんを出産した。
出産の苦しみから解放され、
荒い呼吸をする彼女。
「はぁ、はぁ、はぁ」
何度産んでもこの痛みはなれないなぁ…
やり遂げた母親の顔であった。
はぁ、
はぁ…
はぁ、
はぁ、
ぐじゅ
おぎゃぁ
おぎゃぁ


3人はオークの子を出産した。
オーク達は彼女達に拍手を送り、祭りは盛り上がった。
こじ開けられた性器から伸びるへその緒は彼女達がこの子の母親である事の確かな証拠だ。
彼女達は未来の戦士の命を生んだのだ。


騎士団の副隊長
ただのシスター
有名な踊り子で裏組織の一味
3人が同じ舞台に立つ事など本来あり得なかった。
しかし、雌となった今は過去の地位など関係なかった。
オークにとって新しい生命を生み出す雌は
等しく素晴らしいのだった。
彼女達は雌の幸せに浸りながら
これからも産み続けるだろう・・・


「なんでオレたちが
皆の前で赤ちゃんを
産まないといけないんだよ！」
「ほぇ…
でもオーク様が
求めるならぁ…」
「はぁ♡
こうふんしてきちゃった♡」
「雌としての務めを
果たしましょ♡」


4人の子んぎは雌が頂上に上がった。
オークたちが世界中から狩り集めた女騎士だった者たち。
彼女たちは生まれた地も肌の色も国籍も違っていた。
しかし、今では一つの目的の為に協力し、支え合い暮らしている。
オークの為に身を捧げるという目的の為に。
「なんでオレたちが
皆の前で赤ちゃんを
産まないといけないんだよ！」
「ほら、
「くノ一オーク隊が
来るならば…」
「はぁ♡
こうふんしてきちゃった♡」
「お前らマジかよ…」
「ディララ。
雌としての務めを
果たしましょ♡」
「あ～…もう！わかった！
大股開いて産みゃあいいんだろ！」


いくらか時間が経ち…
大胆に広げた肉の洞窟の
奥から緑色の球体が顔を覗かせた。
「頭が出て来たぞ！」
「うるせえ！ちょっとは静かにしてろ！」
男勝りな性格は雌に堕ちても健在。
傷が原因で婚約者から
逃げられた過去を持つ彼女。
結婚に憧れていたからこそ、
男を恨み、騎士としてひとりで生きていく道を
選んだはずだった。
そんな彼女が今では淫乱な肉体を持つ雌に変えられ、
大勢のオークに見られながら出産していた。
（死ぬほど痛てぇ！
でも！オレが産まねえと…！
オレがアイツの為にできる一番大切な事なんだから…！）
ビクッ
ビクッ
ブルルッ
ズズッ
ブピッ
ビシッ


「～～～～～～～～～～」
大きな悲鳴が会場内に響いた。
あ゛あ゛あ゛
「うふぅ～！！
痛い！！
しんじゃうよおぉ～！！」
頭が見えたぞ！
ほら、頑張れ！
ビクッ
（オーク様の声が聞こえる・・・！
頑張らないと・・・！）
ビクッ
ヌリヌリ
ぐじゅ
ビクッ
自由気ままな人生を送っていた彼女。
しかし、今では運命の人に巡り合い、
自分にしかできない大業を務めていた。
大勢の雄の前にさらけ出した秘部からは
赤ちゃんの顔が出ていた。


「あああああああ!!!!!」
「みて!みて!
ソユル赤ちゃん産んでるよ!!」
苦悶に満ちた顔で腰を振りながら
赤ちゃんを産んでいた。
その姿にオークたちも声を上げた。
不安に満ちた騎士の時代からは想像が
付かない程、彼女は雌になってしまっていた。
オークに愛されている安心と信頼から、
彼女は淫らな姿を晒していた。
おっ♡
おっ♡
ぐぼぼ
ブシュッ♡
ブシュ
「もっといっぱいソユルが
赤ちゃんを産むところ見て♡」


「ほら♡
もうこんなに赤ちゃん出てきてますよ♡」
ビッ
ブルン♡
彼女は痛みを見せず腰を振り赤ちゃんを揺らしていた。
彼女の一族は代々、領主を守る付き人を行っていた。
なので、小さい頃から、主人に尽くすため礼儀を教わっていた。
その教育がオークに対して向けられることになるとは
誰も想像していなかっただろう。
ビクッ
彼女の忠義は本物で今では心の底から主人のオークを愛し、
彼に身を捧げる事を考えている。
雌として出産祭で赤ちゃんを産む事が彼女の重要な務めなのだ。
そして、その時が来た。
「出ちゃいます!!
赤ちゃん産まれます!」
ブラッ


ドバドバァァ
ァ
ビチャア
アアァ
「～～～～～～～～～～」

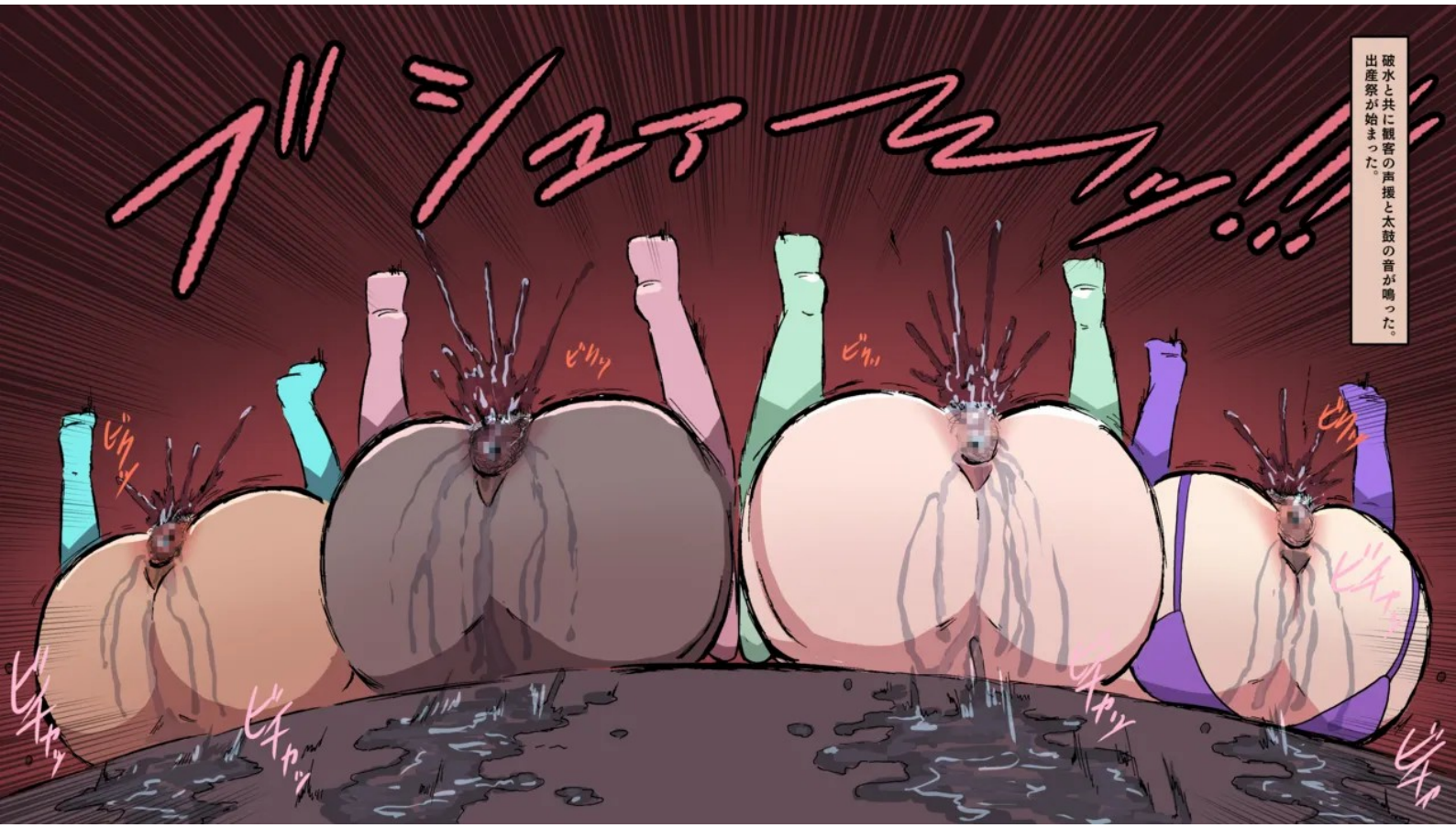

群れの女性陣と交えた悲鳴を上げ、
オークの赤ちゃんを出産した。
「はぁ…
オレはただ可愛いだけなのに…」
「ボクたちっていったい
ホントにどうなっちゃったんだろう
いつ出産が始まってな…」
「えへへ♡
わたしとオークくんの赤ちゃん♡」
「貴方の主人の赤ちゃんが頂けるなんて…
こんな幸せ他にはございません。
これからもお願いいたします♡」
オークたちは妊娠を上げ、「孕ませる」事だ。
淫魔にかんだ彼女たちはこれからも妻としてオークに尽くすのであった。




出産祭
それはオークの進軍を祝う祭り。
様々な肌の色の雌達が
観客たちを興奮させた。
イエーイ


ヴァレンティナ
自信を持って。私たちはもう立派なオークの雌なのよ。
ドキ
ドキ
サヌラ
まだ恥ずかしいよ…
ドキ
ドキ
ナージャ
練習通りすれば大丈夫よ。
ドキ
ドキ
エイプリー
オークさまのためにも頑張っちゃうもんね♡
ドキ
ドキ


数ヶ月前までは未使用で美しかった性器はオークとの交尾で卑猥な形をしていた。
これから赤ちゃんを産みます♡
ムファッ・・・♡
皆さん見てください♡


ブシュァーッ!!!
破水と共に観客の声援と太鼓の音が鳴った。
出産祭が始まった。


頭が見えてきたぞ！
グッ
がんばれ！
グッグッ
立派な戦士を産むんだ！
グッ
グバァ


メリッ
メリッ
メリッ
産まれるぞ！！
メリッ
メリッ
メリッ
もうすぐ産まれるッ！




今後も多くの女騎士が捕まり、雌に変えられていくだろう。
そしてその身体はオークのため使われていくのだった。
オークさま
ばんざい…♡
よくやった!!
新たな戦士の
誕生を祝い乾杯!!
こうして祭りは続いていくのだった。


魔界探索騎士隊は帰って来なかった


そこには3人の女性がいた。
「ちょっと！オリビアさんに近よりすぎじゃない？？」
「いいんだよ、ボクとオリビアの仲だから」
「こらこら喧嘩しないの。オーク様達の前なんだから。」
膨らんだお腹から彼女たちが妊婦なことは明らかだ。
そしてここは魔界にあるオークの国。
彼女たちはオークの雌で
そのお腹にはオークの赤ちゃんがいる。
彼女たちは誇り高き騎士であった。
しかしそれは人間の世界にいた時の話。
彼女たちの思考は今やオークの文化に染まっていた。
真ん中の女性がうっとりとした瞳で言った。
「オーク様。私たちが赤ちゃんを産むところよく見てくださいね」


「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！」
声にならない悲鳴が何時間も続いていた。
最初は余裕あったが今ではただひたすら痛みに耐えていた。
オークの赤ちゃんを産むのに人間の身体は適していない。
この数か月間に彼女たちの体はオークの雌に相応しい身体に改造されていた。しかし、それでも苦痛を味わう。
そして苦痛を中和させるように【雌の印】が快楽を与える。
これまで感じたことのない痛みと快感で彼女たちは嗚咽のような、悲鳴のような何かを上げ続けていた。
彼女たちの股間から緑色の頭が見えてきた。
そろそろ産まれる様だ。


「あああああああああ！！！！！」
3人が同時に声をあげ
股の間から液体と緑の物体を吐き出した。


「ああ、みて…！
あなたと私の赤ちゃん…！
私幸せ…！」
「この子は天才になるよ、
なんたって
ボクの赤ちゃんなんだから」
「私に雌の喜びを
教えて下さり
有難うございます…！」


彼女たちは間違いなく騎士であった
才能で選ばれ
忠義で選ばれ
熱意で選ばれ
努力をし、才能を持ち、誇りを胸に抱き
魔物から民を守るため魔界へ向かったはずだった。
しかし、そこに騎士の面影はなく
慈愛に満ちた眼差しで産まれたばかりの
わが子を見つめる母の姿だった。
彼女はこれからの人生全てをオークに愛され、
赤ちゃんを産み、育てる事になる。
騎士とは無縁の、雌の人生。
彼女たちの
騎士としての人生は
全て無駄だったのだろうか・・・？


The three gave birth.
The sight of them cradling their newborn children was the most beautiful form an orc female could achieve.
They were met with loud cheers from the large crowd watching.
"Wow. He's already drinking milk!"
"Ahh, so happy..."
"Let's have lots more babies together from now on...!"
Orc children are born in a slightly underdeveloped state, requiring care for their mother's body.
For several weeks after birth,
they remain connected by the umbilical cord.
Children born during sacred rites are treated with particular reverence and remain connected for an extended period.
During these days, checking the connected umbilical cord helps the mothers become more conscious of their role as this child's mother.
For them, this child will likely feel like an even more special being.


出産祭
それはオーク族の守護神を祀る祭りの事である。
選ばれた雌たちが美しい衣装を着て大勢の前で
出産する事で一族の幸運を願う行事である。
小梅「恥ずかしい・・・
こんな大勢の前で。」
玉環「今日は特別な日なんだから
恥ずかしがることないわよ～」
桃花「わたしも緊張してきた。
でも3人なら大丈夫だよ！」
彼女たちが大勢の前で股を開き、
陰毛を掻き分け性器を露出させた。
それは祭りが始まる合図であった。


比較的小柄な体形は出産経験の少ない小梅に大きな負担となった。
踏ん張る彼女は騎士の頃の戦闘に勝るほどの表情であった。
苦悶の表情で母乳を漏れ出しながら出産を続ける小梅。
踏ん張る彼女の股の間からは緑色の頭が見えていた。
ブルン♡
ブルン♡
びじゃじゃ
びちゃ
ビビィ…
じゃじゃっ!!


対照的に余裕のある玉環は
身体をのけぞらせながら、出産の痛みに耐えていた。
祭事を盛り上げる彼女の
姿に多くのオークが歓声を上げた。
見てください♡
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
ブルン♡
ブルン♡
「いっぱい見てくださいね。
私たちが新しい戦士を産むところを…！」
性器からぐいっと子どもが出ている所が見えた。
「もう少し……！」
ぐぐじゅっ
ビシュヤヤァアッ!!!


「う、生まれる～～～～～!!!」
母乳をまき散らし、お尻を振って出産する桃花
他のふたりよりも多く出産経験がある彼女。
しかし、どれだけ産んでも出産の痛みになれる事はなかった。
おぉぉぉぉぉ
ビュー
ビクッ♡
ビクッ♡
小柄な身体には似合わない
伸びた女性器の入り口から頭をのぞかせていた。
「あああああああああああ～～～～～!!!!!」
どびゅるるる


3人は出産した。
産まれたばかりの子どもを抱くその姿は
オークの雌として完成されたもっとも美しい姿であった。
それを見た大勢の観衆からの大きな歓声を浴びた。
小梅「すごい。もうおっぱい飲んでる！」
玉環「はあ、幸せ・・・」
桃花「これからも3人でいっぱい赤ちゃん産もうね・・・！」
オークの子どもは母体を
気遣いやや未熟な状態で生まれるため
生まれてから数週間は
臍の緒で繋がったまま過ごす事になる。
特に神事で生まれた子どもは丁重に
扱いより長い時間繋がったまま
過ごす事になる。
その日々の中、繋がれた臍の緒を
確認する事で彼女たちはこの子の
母親である事を自覚する事になる。
彼女たちにとってこの子は
特別な存在に感じるであろう。


出産祭
それはオーク族の守護神を祀る祭りの事である。
選ばれた雌たちが美しい衣装を着て大勢の前で
出産する事で一族の幸運を願う行事である。
小梅「恥ずかしい・・・
こんな大勢の前で。」
玉環「今日は特別な日なんだから
恥ずかしがることないわよ～」
桃花「わたしも緊張してきた。
でも3人なら大丈夫だよ！」
彼女たちが大勢の前で股を開き、
陰毛を掻き分け性器を露出させた。
それは祭りが始まる合図であった。


比較的小柄な体形は出産経験の少ない小梅に大きな負担となった。
踏ん張る彼女は騎士の頃の戦闘に勝るほどの表情であった。
苦悶の表情で母乳を漏れ出しながら出産を続ける小梅。
踏ん張る彼女の股の間からは緑色の頭が見えていた。
ブルン♡
ブルン♡
びゅるるっ!!


対照的に余裕のある玉環は
身体をのけぞらせながら、出産の痛みに耐えていた。
祭事を盛り上げる彼女の
姿に多くのオークが歓声を上げた。
見てください♡
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
ブルン♡
ブルン♡
「いっぱい見てくださいね。
私たちが新しい戦士を産むところを…！」
性器からぐいっと子どもが出ている所が見えた。
「もう少し……！」
ぐぐじゅっ
ビシャヤヤァァッ!!!


「う、生まれる～～～～～!!!」
母乳をまき散らし、お尻を振って出産する桃花
他のふたりよりも多く出産経験がある彼女。
しかし、どれだけ産んでも出産の痛みになれる事はなかった。
おぉぉぉぉぉ
ビュー
ビクッ♡
ビクッ♡
小柄な身体には似合わない
伸びた女性器の入り口から頭をのぞかせていた。
「あああああああああああ～～～～～!!!!!」
どびゅぶぁっ!!
その声と同時に勢いよく
赤ちゃんをひりだしたのだった。


3人は出産した。
産まれたばかりの子どもを抱くその姿は
オークの雌として完成されたもっとも美しい姿であった。
それを見た大勢の観衆からの大きな歓声を浴びた。
小梅「すごい。もうおっぱい飲んでる！」
玉環「はあ、幸せ・・・」
桃花「これからも3人でいっぱい赤ちゃん産もうね・・・！」
オークの子どもは母体を
気遣いやや未熟な状態で生まれるため
生まれてから数週間は
臍の緒で繋がったまま過ごす事になる。
特に神事で生まれた子どもは丁重に
扱いより長い時間繋がったまま
過ごす事になる。
その日々の中、繋がれた臍の緒を
確認する事で彼女たちはこの子の
母親である事を自覚する事になる。
彼女たちにとってこの子は
特別な存在に感じるであろう。


Birth Festival
This is a festival honoring the guardian deity of the Orc tribe.
It is a ceremony where chosen females, dressed in beautiful attire,
give birth before a large gathering of Orcs, praying for the Orcs' good fortune.
Xiǎoméi:
“This is embarrassing...
in front of so many orc.”
Yùhuán:
“It's a special day today,
so there's no need to be shy~”
Táohuā:
“I'm starting to get a little nervous too.
But with three of us, we'll be fine!”
They spread their legs before the crowd,
parting their pubic hair to expose their genitals.
It was the signal for the festival to begin.


Her relatively petite frame placed
a heavy burden on Xiǎoméi,
who had little experience giving birth.
Her expression as
she braced herself surpassed even
her combat resolve
from her days as a knight.
Xiǎoméi continued giving birth,
her face contorted
in agony as breast milk
leaked from her.
A green head was visible
between her legs as she pushed.


In stark contrast, the composed Yùhuán arched her back, enduring the pain of childbirth. Many orcs cheered at the sight of her energizing the festival.
"Watch closely. See us give birth to new warriors..."
見てください♡
はぁ♡ はぁ♡ はぁ♡
はぁっ
ブルン♡
ブルン♡
ぐぢゅっ
I could see the child being pushed out from the genitals.
"Just a little longer..."
ビシャヤヤァアッ!!!


"Ugh, it's coming out~~~~~~~!!!"
Peach gave birth, spraying breast milk and shaking her hips.
She had more childbirth experience than the other two.
But no matter how many times she gave birth, she never got used to the pain.
おぉぉぉぉ
ビュ
ビクン
どびゅ
The head peeked out from the elongated entrance of her female organ, which seemed disproportionate to her petite frame.
She had forcefully pushed the baby out.


The three gave birth.
The sight of them cradling their newborn children was the most beautiful form an orc female could achieve.
They were met with loud cheers from the large crowd watching.
"Wow. He's already drinking milk!"
"Ahh, so happy..."
"Let's have lots more babies together from now on...!"
Orc children are born in a slightly underdeveloped state, requiring care for their mother's body.
For several weeks after birth,
they remain connected by the umbilical cord.
Children born during sacred rites are treated with particular reverence and remain connected for an extended period.
During these days, checking the connected umbilical cord helps the mothers become more conscious of their role as this child's mother.
For them, this child will likely feel like an even more special being.


Birth Festival
This is a festival honoring the guardian deity of the Orc tribe.
It is a ceremony where chosen females, dressed in beautiful attire,
give birth before a large gathering of Orcs, praying for the Orcs' good fortune.
Xiǎoméi:
“This is embarrassing...
in front of so many orc.”
Yùhuán:
“It's a special day today,
so there's no need to be shy~”
Táohuā:
“I'm starting to get a little nervous too.
But with three of us, we'll be fine!”
They spread their legs before the crowd,
parting their pubic hair to expose their genitals.
It was the signal for the festival to begin.


Her relatively petite frame placed
a heavy burden on Xiǎoméi,
who had little experience giving birth.
Her expression as
she braced herself surpassed even
her combat resolve
from her days as a knight.
Xiǎoméi continued giving birth,
her face contorted
in agony as breast milk
leaked from her.
A green head was visible
between her legs as she pushed.


In stark contrast, the composed Yùhuán arched her back, enduring the pain of childbirth. Many orcs cheered at the sight of her energizing the festival.
はぁ♡はぁ♡
はぁ♡
見てください♡
はぁっ
"Watch closely. See us give birth to new warriors..."
ブルン♡
ブルン♡
ぐぢゅっ
I could see the child being pushed out from the genitals.
"Just a little longer..."
ビシャヤヤァァッ!!!


"Ugh, it's coming out~~~~~~~!!!"
Peach gave birth, spraying breast milk and shaking her hips.
She had more childbirth experience than the other two.
But no matter how many times she gave birth, she never got used to the pain.
おぉぉぉぉ
ビュ
ビク
どびゅ
The head peeked out from the elongated entrance of her female organ, which seemed disproportionate to her petite frame.
She had forcefully pushed the baby out.